

論文の要約

氏名：小 林 克

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：近世物質文化の考古学的研究

主論文目次：

第Ⅰ部 研究の方法と課題

第1章 本論の目的と意義

第1節 物質文化研究とその意義……………4

第2節 研究の対象と方法……………4

第2章 近世考古学研究 その検討と課題

第1節 近世考古学研究史……………7

第2節 近世考古学研究の種類と方向性……………9

第3章 方法論の展開

第1節 近世考古学の方法論……………13

第2節 近世考古学と民具研究から物質文化研究へ……………16

第3節 本書における研究の展開……………18

第Ⅱ部 物質文化研究各論

第1章 ボウズと照明具 - 火を使う道具 -

第1節 研究史……………22

第2節 ボウズ……………24

第3節 照明具……………34

第2章 火打石

第1節 研究史……………57

第2節 目的と研究の範囲……………59

第3節 近世遺跡出土の火打石……………61

第4節 民俗調査・文献調査の成果……………74

第5節 産出地の調査……………79

第6節 火打石研究の総括……………88

第3章 今戸焼

第1節 研究史……………90

第2節 現存する今戸焼土器職人への調査……………96

第3節 江戸・東京の瓦と今戸焼……………107

第4節 焼物としての今戸焼の実態……………119

第4章 瓦 漏	
第1節 研究史	127
第2節 市ヶ谷尾張藩上屋敷跡遺跡出土瓦漏の比較・検討	133
第3節 瓦漏研究の方向性と課題	142
第4節 瓦漏研究のまとめと展望	144
第Ⅲ部 海外物質文化比較論	
第1章 考古資料からみる日蘭相互の物資文化交流	
第1節 比較の背景	148
第2節 目的	149
第2章 日蘭17・18世紀の都市の物質文化比較	
第1節 研究の目的と方法	150
第2節 アムステルダム of 歴史と発掘調査	150
第3節 江戸遺跡の発掘調査	156
第4節 比較のまとめ	158
第3章 考古資料からみる日蘭相互の物質文化	
第1節 真砂遺跡出土のクレイパイプ	161
第2節 オランダ国内諸都市出土の日本製品-肥前磁器を中心に-	169
第4章 物質文化の比較・検討 -アジア各地の遺跡からの視点-	
第1節 棧瓦・レンガのオランダから日本への伝播の可能性 -オランダ東インド会社関連遺跡とその出土資料の分析を通じて-	175
第2節 喫煙具の相互影響の基礎的考察	184
第3節 考古資料からみた日蘭の生活文化と VOC	189
第5章 交流する日蘭の物質文化	
第1節 交流と影響	194
第2節 日蘭の物質文化比較と交流	196
第Ⅳ部 まとめと展望	
第1章 はじめに	200
第2章 成果	200
第3章 課題と展望	202
第4章 おわりに	203
引用・参考文献	204

日本考古学研究は縄文時代や弥生時代そして古墳時代などを主な対象として研究が進展してきた。1970年、中川成夫氏・加藤晋平氏は日本考古学協会の総会で、「近世考古学の提唱」という発表を行ったが、これ以降近世考古学は実質的に調査研究が進展し、近年ようやく研究としての展開・深化が開始されてきている。

近世考古学ではその対象やアプローチの方法は多様であるが、好むと好まざるとに関わらず、文献史学を中心として周辺諸学の成果や状況を、必ず視野に入れておくことが必要とされる。文献資料が広く存在する近世という時空間で、考古学的手法を展開するのであり、考古学的分析とその結果だけではよりリアルな歴史復元の可能性を自ら摘むこととなるのである。

近世考古学研究の中で盛んに行われているのが、出土資料(遺物)を対象とした「もの」の研究である。そのなかで大きな部分を占めているのは、陶磁器、土器類の分類、編年研究であり、総じて出土資料の研究は、材質別、形態別、機種毎の研究であった。一方民具研究を行う分野から見れば、民具資料の宝庫とも言われる近世の遺跡からの出土資料に対して、出土資料から歴史的なアプローチを展開し、近世社会の復元を目指す研究はあまり無かったと言えよう。

本学位請求論文(以下、本論という)執筆の目的は、近世の遺跡から出土した様々な「もの」資料をもとに、その生産・流通・用途、歴史等を明らかにしていく事である。出土資料の考古学的分析を出発点とするが、それを文献史学だけではなく、その他の学問分野や資料も用いて分析することで、「もの」の用途や歴史を明らかにするとともに、「もの」から歴史復元を試みる方法―物質文化研究―で近世社会を解明することである。

次に本論の意義については、以下のように考えている。

物質文化研究を押し広げて「もの」資料を分析していくと、近世という時代から現代までその分析対象が延長される事例が多くあるし、空間的にも日本という国の領域を超えて展開する場合がある。これは近世の物質文化のある部分が、近代や現代と関わり合いが深く、海外との相互影響により成立、存在した可能性が、出土資料から理解され、それらを具体的に提示し、比較することで、近世の物質文化が国や地域を越えて影響し合っている事を明らかに出来る利点をもっている。

このように近世遺跡の出土資料をもととした研究は、考古学という範疇に留まらず、より広い意味での物質文化研究の中で拡大し、資料の系譜を解明する方法を示すことで、考古学研究全体の可能性を大きく拡大していくことが出来ると考えている。本論は近世の出土資料を対象に物質文化研究を行うことで、これまでの近世社会像に対して、新たな解釈が行えることを示したことに意義を持つ。

次に本論での研究対象とその分析を行う立場について記す。

本論では日本の近世の遺跡から出土する複数の遺物を対象に、「もの」資料から推定出来る近世社会の復元を目指すものである。そのため、近世の遺跡から出土する資料の歴史的意味や用途を考察することは勿論として、近世社会が同時期の海外との交流を抜きにしては考えられない事象もあることから、同時代の海外の遺跡から出土した資料も分析の対象となる。具体的

に研究対象とするのは、筆者が主体的に調査・研究を行ってきた江戸遺跡出土資料と、それらの資料を比較・検討するための国内の別地域、さらには海外の同時期の資料が該当する。

具体的に分析を展開する第Ⅱ部では、近世遺跡出土資料のなかで、その用途や系譜など不明点の多い資料を取り上げる。近世考古学が対象とする範囲では、文献資料も多く存在し、出土資料の解釈に文献資料を用い、文献史学の成果を引用する事が必要になる。ただし、ここでは方法論の違いをきちんと峻別し、論を進める必要がある。H.J.エガース氏が言うように、考古学と文献史学はその方法論的相違を認識した上で、各々の学問領域の中での結論を検証し合い、確かな歴史としての「ジントーゼ」(H.J.エガース/田中・佐原訳 1981:p.314)を目指すことが大切である。加えて本論では、出土資料から検討を進めるに際し、民具研究の手法や資料、更に民俗学的調査事例も対象とし、より広範囲な近・現代の資料も援用する。こうしたいわば第3の分野の資料等を分析に用いる際にも、それぞれの学問分野の内容を峻別し、対象とする資料の諸属性の相違を認識した上で、そこから導き出される内容は、仮説の提示であり、その仮説を様々な分野から検証していくという立場で論を進める。学問分野の異なる資料は、その分野における資料批判が必要であるが、三つの方法を用い、過去のあり方を明らかにして行くという方法は、近世の物質文化研究に対しては有効であると考えられる。

近世考古学を対象に考える時、既に我々の現代の生活や文化からは消滅し、そして「伝承」からも消え去ってしまったものも多く存在する。江戸遺跡研究の中で発掘調査が多数開始された1980年代後半では、現代にとっても近い時代と考えられた近世のものでも、その用途が全く分からなかったものが多く存在した。

こうした考えのもと資料の分析を進めていくが、本論での分析方法は以下の通りである。

まず、近世遺跡から出土した資料の考古学的分析・資料批判を行う。次に文献史学や民具研究等異なった方法を持つ分野の資料との比較研究や、聞き取り等の調査内容から、その資料の関係性や系譜を検討していく。つまり出土した資料を対象としつつ、より広範な意味での物質文化研究を通して「もの」から見える歴史の再現を目指す。ここでの分析の過程で、近世遺跡出土の資料を捉えるために、分析対象は近世という時代を越え、現代までも対象とする。また物質文化を追求し、様々な交流や影響を調べる中で、日本という空間的範囲も超えて調査・研究を進める。近世の物質文化を追求するためには、海外の資料も対象としないとその系譜や歴史が分からないのである。

第Ⅱ部「物質文化研究各論」では、「ボウズ」・「照明具」・「火打石」・「今戸焼」・「瓦漏」、第Ⅲ部「海外物質文化比較論」では、国内だけでなくオランダなど海外の同時期の遺跡から出土している「キセルやクレイパイプ(喫煙具)」、「茶の道具」、「瓦やレンガ」等を対象とした。そして江戸遺跡をはじめとした日本国内の近世遺跡から出土している、海外で生産されたと考えられる資料、および海外の同時期の遺跡から出土している日本製の資料や当該国以外の国や地域で生産された資料を主な対象とする。

個別の研究については、以下のように進める。

第Ⅱ部第1章では「ボウズと照明具 -火を使う道具-」では1990年代中頃まで、考古学的には火鉢として認識され、用途としては手あぶりと考えられていたものであるが、絵画資料や民具資料からその用途を再検討した。「照明具」では、多くの部材や用具で構成される照明具の「部分的」なものが出土しており、その用途、機能の理解は、全体としての照明具の構造を理解する必要がある。そのため民具資料の照明具の分類を行い、それに考古資料を対比して当てはめ分析する。

第2章で扱う「火打石」は、1980年代後半、江戸遺跡の調査が多く開始された頃は、その用途など不明であった。石材の稜線が強く摩耗し擦痕が稜線全面に認められる点を特徴とするが、年代・用途が不明であった石を火打石であると確認し、その生産や流通・使用の実態について明らかにする。

第3章の「今戸焼」は、近世に存在した土器等を主体とする製陶業とその焼物であるが、その製陶業の系譜をもつ職人が20世紀後半まで場所を変えて生産を続けており、そうした職人への聞き取りや様々な資料の分析から今戸焼の変遷や実態について論ずる。

第4章の「瓦漏」は白砂糖製造道具の土器製容器であるが、21世紀初頭に日本で始めて関西でその出土が報じられたが、実は江戸遺跡からも出土していたことを明らかにし、その歴史的背景について論を進める。

第Ⅲ部「海外物質文化比較論」第1章では、日本に於ける近世の物質文化が海外との交流で成立したものが多くを踏まえ、日本とオランダとに相互の影響があることを述べ、その背景や比較の目的について記す。江戸遺跡やその他の近世遺跡から海外、オランダ等の製品が出土しており、またオランダのアムステルダムに於いても日本製品が出土していることを明示し、その背景や理由を論ずる。

第Ⅲ部第2章ではアムステルダムの発掘調査の概要と、検出された遺構等について紹介し、江戸遺跡の同種の遺構と比較検討する。

第Ⅲ部第3章では、最初に真砂遺跡から出土したクレイパイプについて分析し、なぜ真砂遺跡から出土したのか、そして江戸遺跡からクレイパイプの出土する意味について考察する。次にオランダ国内で出土している肥前磁器についての調査成果について明らかにする。

第Ⅲ部第4章では、全体として東南アジアや東アジアのオランダ東インド会社関連の遺跡の発掘調査の概要を示す。最初に棧瓦とレンガについてオランダ国内、アジア各地のオランダ東インド会社関連遺跡、平戸・長崎等から出土した資料の胎土分析を行い、その生産地を推定し、物質文化交流について分析する。次に喫煙具について、同様にアジア各地オランダ国内の17世紀初期の遺物について分析する。最後に日蘭の生活文化比較を上記遺跡出土資料から分析する。以上のような分析から日蘭物質文化交流の背景にはオランダ東インド会社の活動がどのように影響していたのか、アジア各地の遺跡出土資料を紹介し検討する。

第Ⅲ部第5章では、第Ⅲ部全体の結論としてまとめる。

本論では近世遺跡から出土した資料について以上のような問題意識を持ち、分析を進めたが、本研究での分析の結果を、「成果」と「課題」として要約すると次のようになる。

第Ⅱ部の成果としては、以下の通りである。

第Ⅱ部第1章では江戸遺跡出土資料の中で火鉢類とされたドーム型の土器類について分析し、それがボウズといわれる真綿のばしの道具であると明らかにした。江戸遺跡出土資料、民具資料相互に存在する刻印が今戸焼職人のものであり、今戸焼として少なくとも17世紀末からは屑繭を延ばした真綿を製造する道具として、使われていた事を明らかにした。照明具に関しては、出土資料だけではその理解に限界があり、民具資料に基づいて照明具全体の構成に基づいた分類を行い、その上で出土資料の位置づけを明確化し、出土資料の用途や役割を示すことができた。

第Ⅱ部第2章では江戸遺跡から出土した角（稜線）の摩耗した石類を、火打石だと明らかにした。そして江戸遺跡から出土する火打石を分析し、現在の産出地の調査、文献資料調査や民俗的調査から、江戸時代の生産、流通、使用の流れの一端を明らかにした。具体的には茨城県諸沢村の調査等により江戸には諸沢系の白色透明な石英が火打石として多くを占めていたことを示した。また渋谷区北青山遺跡出土火打石の分析から、火打石の接合事例を確認し、購入から摩耗した石を再度打ち割り、鋭い稜線を再生し再利用するという使用の流れを確認することが出来た。また数量的には少ないが、都市江戸には中京・関西方面で産出・使用されている各種チャートの火打石も持ち込まれていたことを江戸遺跡出土火打石の分析から明らかにした。

第Ⅱ部第3章では都市江戸・東京の製陶業である今戸焼について、その歴史的変遷や、軟質陶器も製造されていた事を示した。また、現在の台東区今戸には、江戸時代の製陶業の地という面影はほとんど無いが、現代に残る今戸焼職人に対する民俗的調査から、江戸・東京の発展と都市化の拡大の中で、幕末から近代にかけて順次東京の東部に移転していき、そして第2次世界大戦後まで、移転先の葛飾区内等でも今戸焼職人という纏まりを維持して製造を継続していたことを確認した。

第Ⅱ部第4章では今までその存在が知られていなかった白砂糖作りの道具である土器・瓦漏について分析した。瓦漏は世界共通の白砂糖作りに必要な道具の土器であるが、こうした瓦漏が市ヶ谷尾張藩邸跡遺跡でも出土していることを明示した。そして讃岐地方の原間遺跡から検出された砂糖竈と、尾張藩上屋敷跡遺跡から検出された竈跡の類似性から、尾張藩邸跡遺跡では砂糖窯を使って白砂糖製造を行っていたことを明らかにした。本研究により、尾張藩上屋敷の中で当時の最先端の技術を用いた白砂糖製造が行われていたという大名屋敷の新たな一面を明らかにできた。そして日本にも江戸後期の一時期に、瓦漏を使った白砂糖作りが西日本一帯に存在していた可能性を指摘した。

第Ⅲ部では第1章で日本と海外、特にオランダの考古資料による物質文化比較の意義や目的等を示した。

第Ⅲ部第2章では江戸とアムステルダム17.18世紀の生活の基盤である水道システムやゴミの廃棄遺構とそのシステム、建物やその基礎構造、埋め立ての遺構とその方法等を提示・比較し、類似するものと異なっている物があることを示した。

第Ⅲ部第3章ではオランダ製のクレイパイプが文京区真砂遺跡から出土している事の意味や背景を明らかにした。そして近年の発掘事例の増加や各種史資料から、クレイパイプが江戸時代にはオランダキセルとしてある程度知られていた可能性を示唆した。

次に日本国内からも多くのオランダ製品が出土しているが、オランダ国内での日本製品・特に肥前産磁器に絞り調査してその結果を示した。オランダでもアムステルダム以外の都市からも日本製の磁器が出土している事を明らかにした。

第Ⅲ部第4章では日本とオランダの物質文化交流の背景として、その経由地である東南アジアを分析の対象とし、棧瓦・レンガ・喫煙具について分析した。その結果、棧瓦は、インドネシア・ティルタヤサ遺跡とタイ・アユタヤのオランダ人居住地から出土している事が判明し、明確な証明はできなかったが、オランダ起源説について可能性が高まったことについては指摘できた。レンガについては、既に江戸時代初期にオランダ産の黄色系レンガや、オランダの勢力圏であった台湾産の赤色系レンガが日本にもたらされていたことが判明していた。これをもとに平戸や長崎・出島からはそうしたレンガに類似する日本産の瓦質「レンガ」が出土している事を示し、海外からの影響で日本人が作ったレンガであろうとした。

喫煙具については、17世紀初頭時点でオランダにも金属製パイプが存在し、東南アジア各地にも金属製パイプが存在しており、また沖縄を始めとして土製のパイプもアジア各地に存在しており、16世紀後半以降のタバコ伝播初期の様相が多様である事を示した。そしてタイ・アユタヤや台湾ゼーランディア城、そして日本の平戸・長崎等の発掘の状況を示し、様々な物質文化の交流が認められることを示した。具体的には陶磁器類の薬壺やお茶用の碗・皿等が日本で製造されオランダにもたらされた。そしてオランダからもたらされた物として、クレイパイプやワインボトル、ジェニーバボトル、影響の存在した可能性があるものとして棧瓦や照明具等々を示した。

第Ⅲ部での成果をまとめると、鎖国していたと言われてきた江戸時代でも様々な物が海外からもたらされ、また日本の物がオランダ等にもたらされていたことが出土資料の調査から判明した。そして江戸文化や生活の道具、生活スタイルにまでオランダなどの海外文化の影響があることやその可能性を提示することができた。近世段階でタバコの喫煙具や、茶を飲む容器や道具など、様々な点で物質文化の交流と相互の影響が認められた。平戸や長崎にはオランダ産のレンガや台湾でオランダ東インド会社が作ったと考えられるレンガも、もたらされていたことが明らかになった。

従来江戸というと、日本の伝統文化が花開いた時代というイメージが強かったが、考古資料の個別研究を積み重ねる事で、江戸時代初期から江戸の生活や文化には海外からの影響が存在し、また江戸時代の日本の生活スタイルや物質文化が、ヨーロッパなど海外に影響を与えたことを、示すことが出来た。それは相互の交流が存在していたことの証である。つまり考古資料から物質文化を探求することで、「鎖国」というイメージとは違った、江戸時代のイメージの一端を具体的に示すことができたといえよう。

本論では、近世考古学研究の一つの方向性として、遺跡から出土した資料を多角的に分析することで、上記のような成果が得られた。そして新しい方法論を提示し、それを具体的に遺物の研究を進めることで、有用性を確認できた。

しかしながら本論で展開したような方法論を用いた研究はまだ始まったばかりである。不明だった物の用途を明らかにし、新たな近世社会像を描く事ができたが、以下にあげるように課題が存在している。

以下、今後の研究の課題についてまとめる。

第Ⅱ部第1章の「ボウズ」については、江戸遺跡以外の近世遺跡での出土が限定的であり、江戸遺跡の事例も、改めて集成して本論で提示した方法にそって、分析することが第一に必要な作業となろう。

第Ⅱ部第2章「火打石」については、発火具として取りあげたが、日本考古学では旧石器時代～近世にかけての発火具は、実態的な追究はほとんどなされていない。本論で明らかにしたように近代に入っても火打石の産出は続けられており、それらの文献資料の分析を手始めとして、近世段階の他の産出地を調査し各地の生産・流通・販売・使用の実態を解明することは勿論、今後は近世から遡って、より古い時代の発火具について、火打石を中心に、明らかにしていく必要がある。これによって日本の発火具の歴史における火打石の位置付けが明確になると考える。

第Ⅱ部第3章「今戸焼」では、その内にふくまれると予想する、今戸焼の軟質陶器の実態究明が急務である。今戸焼で軟質陶器が製作されていたことが確認できれば、各地での出土等とおして、生産地の江戸と消費地との間でのあらたな流通や交流が展開していたことが想定されるからである。今戸焼の成立・発展の過程でも、直接ではないにせよ間接的に海外からの影響が想定される灯火具（形態・透明釉の技法）や軟質陶器があり、それらの追求が今後の課題である。

第Ⅱ部第4章「瓦漏」では、瓦漏が白砂糖生産に関わる資料であることが解明できたが、この製法が日本各地でどのように展開していったのか、全国での類例から検討する必要がある。奄美地方の喜界島に伝世した瓦漏を紹介したが、これとの比較を行うためにも、讃岐地方での瓦漏の実態を明らかにするとともに、台湾から瓦漏が入ってきたかどうかを検討し、奄美地方、沖縄地方の調査が重要である。また江戸で開発された技術と沖縄での実態や台湾からの影響についても、瓦漏を中心に見ていきたいが、第一に出土資料の増加が待たれる。

第Ⅲ部での課題として筆者は棧瓦オランダ起源説を提示しているが、未だ確定できる資料が発見できておらず仮説の段階である。この課題を追求するためにオランダからの影響が直接あった九州や、東南アジア各地の調査を進めることが必要と考える。

また喫煙具の相互影響や歴史的変遷を明らかにするためには、東南アジアや日本各地の戦国期から近世初期のキセル等の出土事例を集め金属成分の比較・分析を進めることが重要となる。

以上第Ⅱ部・第Ⅲ部の具体的な分析事例について、その成果と課題について述べてきた。主に、出土資料から物質文化を追求してきたが、第Ⅱ部では、近世の出土資料を元に、それを物

質文化研究の素材として近代・現代まで様々な分野の資料から多角的に分析を試みた。いわば時間軸を近世という時代から解き放ち、物からの歴史を現代までたどりつつ、追究したと言える。第Ⅲ部は近世遺跡出土資料の物質文化研究を進めると、そこには空間として日本という領域を越えた交流や相互の影響が存在することを、資料等の比較検討から示すことが出来た。

本論では、江戸遺跡出土資料からその分析を開始したが、物を主体とした物質文化研究という枠組みでは、時空を超えて分析が広がり、新たな歴史的解釈が生まれてくる可能性を示すことが出来た。今後も、既成の学問領域を横断する方法論の検討と、具体的事例の分析を交互に進め、本論で述べた様な資料やそれ以外の資料についても物質文化研究を推し進めていくことが、これからの近世社会の復元にとって有益な方法であると確信する。

本論では「物質文化」をもととした研究方法の提示とそれに基づく具体的研究を展開し、新しい研究成果の提示、そして今後の展望も示せたと考えている。まだ物質文化研究は途中にあるが、今後もその課題解決に向けて研究を進めていく所存である。